歳時記の郷

～第50号記念誌～

2009年新春 第50号

# 奥会津だより

只見川電源流域振興協議会

◆50号記念対談◆

# 未来への贈り物

齋藤茂樹（只見川電源流域振興協議会監事・三島町長）　赤坂憲雄氏（福島県立博物館館長　東北文化研究センター所長）

## 聞き書き－未来に繋げる仕事

**齋藤**　只見川電源流域振興協議会が20年間やってきたことを、この先の10年にどう繋げていくかが問われています。具体的には只見川の川筋全体がひとつのエコミュージアムのような、日本の最後の砦みたいな地域にならないかなあと思っているのです。

**赤坂**　そのためにも、現在監修をさせていただいている「こどもの聞き書き」と、今後の展開が待たれる映像記録を次の10年で形にしたいものです。

聞き書きというのは、おじいちゃん、おばあちゃんの人生を聞いて、それを書くという、極めて単純なことなのですけれども、それは、地域に生きる人たちの記憶を掘り起こして語り継ぐ仕掛けとしてとても重要です。何が起こるかというと、おじいちゃんの戦争体験を聞き書きしていてふっと孫が気がつくわけですよ。もしかしておじいちゃんがその時戦場で亡くなっていたら、自分は生まれていなかった。今、自分がここにいるということは、たくさんのいのちの繋がりの中にあるんだということに気づくのです。つまり、聞き書きというのは、おじいちゃん、おばあちゃんの人生を分けてもらうのですけれど、今の若い人たちの生きていることに対する力強い励ましになるのです。聞き書きを方法として世代を繋ぐこと。世代を繋ぎながら、奥会津に生きてきた人たちの記憶を掘り起こし、語り継ぎ、次の世代に伝えていく、その仕事はとても大切だと僕は思っているんですね。ですからぜひ、次の10年の只見川電源流域振興協議会の仕事の中核として「聞き書き」を継続させたいと願っています。

僕は大学で聞き書きの授業をやったことがあるのですが、そのレポートを読みながら泣いてたんですよ。レポートの中に繰り返し出てくる言葉があったのです。「ありがとう」「感謝」という言葉です。道徳の授業なんかやるよりも、聞き書きを教育の場でぜひ取り上げていただきたいですね。

**齋藤**　それはいいですね。じいさまやばあさまたちに孫たちが話をしてくんつぇ、なんてことは、なかなかない。何らかの形でそういうきっかけを作って、うちのじいちゃんは子どものときはどんなだったのかと、話を聞く姿勢が出てくると変わってくる。聞き書きをした子どもたちの気持ちがわかるような気がする。この活動を「歳時記の郷・奥会津」という自分たちの共同体でやろうとしているわけですが、これほど広いエリアでやっているところは全国的にもないでしょう？

**赤坂**　ありませんね。

**齋藤**　これはこの流域の今後10年間の方向を決めていく上で、ものすごく重要な意味をもつものです。今までのまとめを含めて出来る可能性はありますね。

**赤坂**　世代を超えた絆みたいなものが壊れていく時代の中で、ただ話を聞くというだけで、その絆がもう一度取り戻せたりする。

**齋藤**　不思議ですね。

**赤坂**　ある女の子は、戦争の体験を聞き書きしてきたんです。そうしたらあるところにきたら、おばあちゃんは泣いてしゃべれなくなるのです。工場に動員されて敵の飛行機に襲われて逃げるときに、手をつないでいた友だちが死んでしまった、と、生々しく話すわけです。自分が生きていることに自信がなくて、なんでオレのこと産んだんだよ、とか色々なことを思っている子どもたちが、そうか、あの時おばあちゃんが死ななかったから、今の自分がいるんだということが、ものすごく大切な大事なことに思えてくるんですね。そうすると、ありがとう、何もいらないから長生きしてください、というような言葉が出てくるんですよ。

**奥会津書房**　三島のじいちゃんもそうなんです。孫がよそに行ってもいいぞ、と。おまえのじいちゃん、ばあちゃん、お父さん、お母さんがこの三島にいるってことを忘れんなよ、と言うんです。あれは感動的ですね。「こどもの聞き書き」というのは、一枚の写真を手がかりに、この写真、何？と聞くところから始まるのです。

**赤坂**　それはもうひとつの仕事です。今出来ることは、記憶の掘り起こしと検証だと思っています。写真を前にすると記憶があふれ出すのです。今は失われた風景、そこに埋もれている記憶に辿りつくんですね。だから僕は、古い写真と小さな物語を掘り起こそうと言っています。

家庭に埋もれている色々な写真を掘り起こすと、小さな物語が百、千、一万。

一万の奥会津物語を掘り起こすことができたら、次の世代への大きな贈り物になると思うのです。聞き書きと同時に写真も掘り起こして、デジタルミュージアムとして明治、大正、昭和と蓄積されてきたものを散逸させないように取り込めないものかと。

**齋藤**　食べ物も情報も溢れるようにあるけれど、自分の体で覚えたものじゃない。そんなのオレは知ってると錯覚を起こして、残念な事件が相次いで起きてしまう。聞き書きや写真、映像記録という手法はぜひ、これからの流域の柱として進めていくようにしたい。

**赤坂**　10年間の継続事業としてやれば、たとえば百じゃ力にならなくても、一万集まったらすごい力になる。

齋藤茂樹

## 映像記録に託す未来

**赤坂**　さらに今必要なのは映像記録。まだ豊かに残っている奥会津の風景を映像としてきちんと残したい。願わくば、映画製作グループに会津に住んで10年間撮ってほしいとずうっと思っているのです。それはやはり、次の世代への贈り物になるし、地域資源にもなっていく。しかし予算は単年度で使い回されてそういう腰を据えた仕事というのはなかなか出来ない。そうではなく、10年間かけて若い映画作家に住み込んで撮ってほしいな。そういう記録映像がもし出来たら素晴らしい財産になるだろうと思います。映像の力は圧倒的です。

## 縄文人はなぜ雪の国に住み続けられたか

**齋藤**　この奥会津に人間は縄文時代から住んでいます。一年の半分以上は雪なのに、それが不思議でならない。

**赤坂**　それはね、山こそが暮らしの舞台として圧倒的に豊かだったからです。狩猟、採集、焼畑とかを組み合わせた暮らしには無尽蔵の資源がその環境の中には転がっているわけですよ。5千年前の日本列島の人口は30万人ぐらいだったといわれている。その人口の8割が、信州・東北を中心とした東日本なんです。西日本に人が住んでいないのです。縄文人から見たら平野部なんていうのは荒地で、人間の住む土地じゃないんです。冬がどんなに長くても、彼らはサケなどを保存する技術をすでに持っていましたから、冬を越す技術を持っていたのです。むしろ、彼らが恐れたのは夏場だと言われています。雪に閉ざされた冬がマイナスだと我々は思っていますけれど、実は雪に覆われなくてはできない仕事はたくさんあって、山奥に入って大きな木を切り倒して丸木舟を作る。動物の足跡を追って狩猟をする。調べてみると縄文時代の狩猟は冬なのです。

赤坂憲雄氏

## 次の世代への贈り物

このように雪が降ることによって出来た仕事というのは、実はたくさんあったのです。そういうことを丸ごと記録映像に残し10年かけて撮ることができたら、それは奥会津にとっては次の世代への最高の贈り物になるだろうと思っているんですよ。

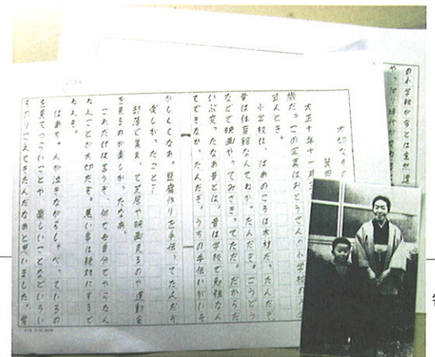
**齋藤**　雪国だから嫌だなあと言う今の人たちの考えを、今もう一度、雪国だからこその豊かさをきちっと呼び起こさせることが大事なんだ。

**赤坂**　工芸や伝統的な技術というものは、間違いなく縄文時代から繋がっている。だから一万年の技（わざ）なんですよ。

**齋藤**　只見川電源流域振興協議会の中でやってきたのは、各町村が施設整備のハード事業で20年間予算を使った。これからは、7ヶ町村が共通して一貫した流れの中で連結して選択すべきだというのが私の思いです。

**赤坂**　是非そうしてほしいですね。

（取材・奥会津書房）



寄せられた原稿と写真

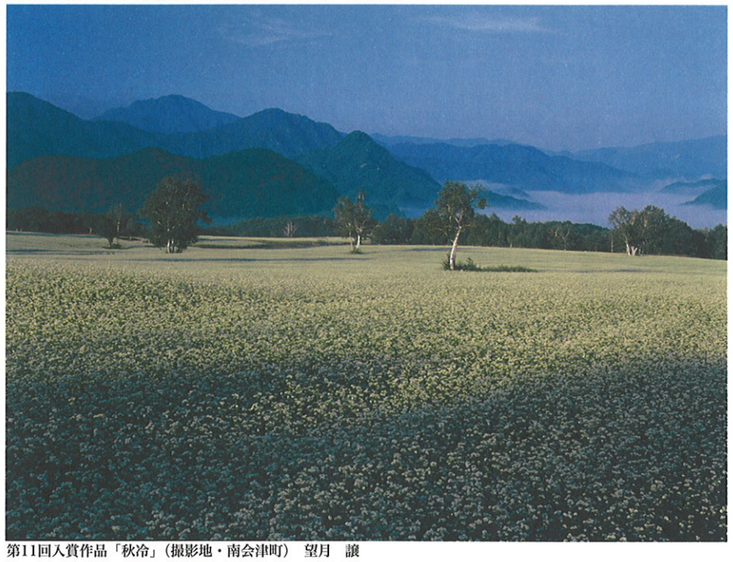
奥会津写真館

# とっておきの風景

フォトコンテスト入賞作品より

四季の鮮やかな変化の中で、奥会津を彩る色彩はめまぐるしく変化します。風景は必ず人々の暮らしとかかわりながらその姿を維持してきました。
一方、わら葺家屋の消滅とともに、それを支えていたさまざまな風景が消えていきました。しかし、自然に添いながら暮らす姿に変わりはありません。

第5回歳時記賞作品「木道をゆく」（撮影地・檜枝岐）　菊池良次



第11回入賞作品「秋冷」（撮影地・南会津町）　望月　譲

第10回グランプリ作品「幽谷」（撮影地・三島町）　三浦孝之

## 懐かしい風景

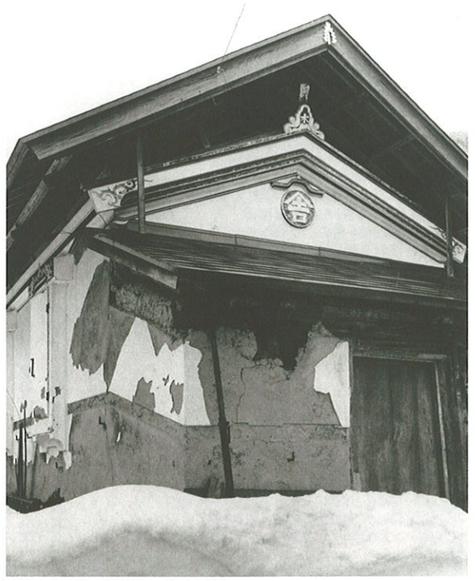
撮影：竹島善一

昭和51年10月　金山町・玉梨

昭和51年7月　金山町・太郎布

平成15年11月　南会津町・南郷

昭和52年5月　昭和村・野尻



平成15年2月　柳津町・湯八木沢

昭和52年8月　昭和村・大芦

昭和58年9月　金山町・三条

# EVENT HISTORY

過去10年の活動の中で柱となった事業です。多くの方々が集い、学び、交流を深めました。

平成12年度～
**トレイルウォーク／エコハイク／ウォーキング**
**奥会津ウォーク**

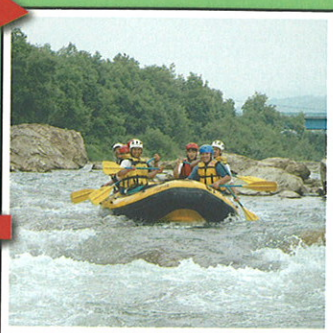
平成8年度～平成17年度
（第1回～第10回）
平成19年度～（第11回～）
**歳時記の郷奥会津フォトコンテスト**

平成8年度～平成17年度
**奥会津俳句大賞**

**歳時記の郷**
**奥会津まつり**

平成18年度～
**奥会津景観保全事業**

平成18年度、19年度
**奥会津人材育成事業**
**「語り部講座」**



平成13年度～平成18年度
**カヌー・ラフティング事業**

# 奥会津の名山 04

## 本名御神楽

写真と文・森澤堅次

本名御神楽（1266m）は本県と新潟の境にある格式の高い山である。会津総鎮伊佐須美神社が御神楽岳から移り、博士山・明神ケ岳と遷宮を続けて、現在の会津美里町会津高田宮林甲の地に鎮座されたのは欽明天皇13年（552年）と縁起は伝える。会津に縁のある御神楽岳が新潟県に位置するのは奇異であるが、明治2年廃藩置県の後、明治9年に福島県が生まれ、さらに明治19年5月に東蒲原郡は新潟県に編入された経緯がある。

金山町三条に住んでいた栗田新吉さん（平成3年4月30日没　享年81歳）の杉植林看視小屋に泊めてもらった事があった。その折、御神楽の雨乞いの儀式について教えて頂いた。本名御神楽の頂にある岩に祭壇を設け、御神体であるお神楽岳に祝詞を奏上したものであると。頂上までは行くものではなく、御神体を足下にするとは不尊であろうも言われた。栗田さんからは他にも多くを教わり、山村民俗の大いなる語部であった。

本名御神楽の登山口は本名ダムから三条林道をおよそ9km走ったところにある。途中に三条集落跡があり、彼岸と盂蘭盆には供花を見る。大鍋岐又沢を渡った所から歩き、八乙女滝、細里、八丁洗板（昔岩魚が立って泳ぐほど多かったと言う）、杉山ヶ崎、熊打場を経て登頂する。標高差830m、行程4時間を要する中級コースである。毎年6月第1日曜日、金山町による御神楽岳山開きが開催されるので、参加を勧める。

1977.5.4撮影（快晴）
新潟県境駒ヶ森山より望む御神楽岳
（向かって左）と本名御神楽。
中央は前ヶ岳の「アバランチ・シュート」と呼ばれる崖。

◆著者プロフィール
1940年秋田市生まれ。秋田大学鉱山学部機械工学科卒業。玉川機械金属（現三菱伸銅）若松製作所に就職、山岳部を創立。主将、部長を経て2000年退職。日本山岳会、南会津山の会に所属し、尾瀬国立公園自然指導員。著書「山を訪ねて」「噂峠会津篇」共著「会津百名山ガイダンス」「神々が宿る森　会津」「新版会津の峠」等